日本の名湯(四)　湯田中渋温泉郷(長野県)―日本的温泉情緒豊かな木造旅館が並ぶ温泉街

湯田中渋(Yudanaka-Shibu)温泉郷は長野県北東部の山ノ内(Yamanouchi)町に位置し、長野県では最大、日本でも有数の温泉郷である。

そもそも長野県は《温泉県》として知られる。2019 年度環境省統計によると、全国 47 都道府県の中で「温泉地数」は 205 箇所で、北海道(243 箇所)に次ぐ第 2 位。湯元(泉源)数にあたる「源泉総数」は 966 本で第 7 位。総湧出量は第 8 位。「温泉利用の公衆浴場数」に至っては 730 箇所で全国 1 位。なお、この「温泉利用の公衆浴場数」は、温泉資源が地域住民にどれだけ日常的によく利用されているかを知る指標の一つ。長野県の歴史ある温泉地や湯田中渋温泉郷の特色をも示すので、後に詳しく紹介したい。

湯田中渋温泉郷は、横手山(標高 2,307m)など 2 千メートル(m)級の山に囲まれた志賀高原から流れ出る横湯川と角間川、その二つが合流した夜間瀬(Yomase)川に沿った計 13 の温泉地で構成される。さらに夏は避暑地、冬は snow resort として人気の志賀高原には平床(Hiratoko)大噴泉が観られ、温泉地が 8 箇所ほどある。湯田中渋温泉郷から志賀高原を抜ける国道 292 号線で県境の渋峠(標高 2,172m：日本の国道の最高地点)を越えると、群馬県の草津温泉や万座温泉はすぐ。いかに温泉密集エリアかわかるだろう。

志賀高原の湖沼の一つ「渋池」(左)／平床大噴泉(右)(以下提供：石川)

湯田中渋温泉郷の中心は、名称どおり渋温泉と湯田中温泉で、歴史もいちばん古い。その二つの温泉をはさんで、志賀高原寄りから順に「猿が湯浴みする温泉」「Snow Monkey」として海外観光客も多い地獄谷(Jigokudani)、上林(Kanbayashi)、沓野(Kutsuno)、角間(Kakuma)、安代(Andai)、星川(Hoshikawa)、穂波(Honami)、新湯田中、上条(Kamijo)、戸狩(Togari)、佐野(Sano)の各温泉が団子のように並ぶ。

湯田中渋温泉郷は、泉温が 44℃～98℃と高温泉が豊富で、地獄谷温泉には 99℃の熱泉と水蒸気が間歇泉となって噴出する国の天然記念物「渋の地獄谷噴泉」がある。温泉郷では 1950 年代から掘削(boring)が始まり、源泉数は激増した。それでも本来の自然湧出泉も健在で、老舗旅館の地下から温泉がぼこぼこと湧き出る光景も目にする。

泉質は多様で、主に単純温泉、塩化物泉、硫黄泉(硫化水素型)、硫酸塩泉の 4 つが挙げられる。ほとんどは無色透明な湯だが、渋温泉では鉄分を含んで少し赤茶色を帯びた湯も「外湯」と呼ばれる共同浴場(共同湯)で体験できる。温泉の提供状態は、自家源泉を持つ老舗旅館や「外湯(sotoyu)」は基本的に源泉かけ流し。高温泉で塩類を多く含むことから、入浴すると体がよく温まり、冬は冷え込む山国の信州(Shinshu)＝長野県の人々の暮らしに大きな恵みとなってきた。

湯田中温泉「よろづや」の「桃山風呂」

湯田中渋温泉郷の魅力は温泉ばかりではない。何より、訪れるとどこか懐かしくほのぼのとした気分になる、いかにも日本の温泉地らしい情緒が漂うことである。

湯田中渋温泉郷のメインとなる石畳を敷いた温泉街の通りは、渋温泉の発祥となる温泉寺の山門下から始まり、隣接する安代温泉まで細く長く続いている。その石畳の温泉街に伝統的な木造二階建てや三階建ての老舗和風旅館、土産物屋などが軒を並べ、同じく伝統的な造りの「外湯」(共同湯)が点在している。この日本的な温泉街景観がすばらしい。

渋温泉の温泉寺山門(左)／渋温泉の石畳街(右)

渋温泉以外でも安代、湯田中、新湯田中、上林の各温泉に老舗和風旅館は多い。圧巻は渋温泉の石畳街にそびえる木造四階建て旅館「金具屋(Kanaguya)」で、一部は国の登録有形文化財に指定されている。宿泊客は旅館主の案内で館内を巡り、廊下や階段、部屋の細部にまで匠の技が光る凝った造りや工芸作品、所蔵物を見学できる。

渋温泉の木造四層旅館「金具屋」

湯田中渋温泉郷のさらなる魅力は、「外湯」と呼ばれる各温泉地の共同湯巡りの楽しみである。先の環境省統計の「温泉利用の公衆浴場」に共同湯は大きな比重を占めている。

湯田中渋温泉郷の外湯＝共同湯と温泉資源は地域住民団体が《総有》し、今日まで共同で維持管理してきた。つまり歴史的資産なのだ。世界的に海洋資源や山林、水資源と同様に温泉資源も《みんなの地域資源(commons)》とみなされてきた。こうした地域資源は個人が独占して営利目的で乱獲・濫用すると、いずれ枯渇してしまう。そこで温泉資源と浴場など温泉利用施設を地域住民が持続可能なかたちで共同利用できるように、地域資源の共同管理という英知を歴史的に育んだのである。今日注目される SDGs を先取りしていたと言えよう。

湯田中渋温泉郷ではすでに 17 世紀の江戸時代の史料にそうした取り組みが見える。1868 年の明治維新以降は導入された西洋的な近代法に対応するかたちで、温泉資源と共同湯を管理運営する財団法人が渋温泉と湯田中温泉にそれぞれ創設され、その後は他の温泉地にも温泉管理組織ができ、今日に至っている。

湯田中渋温泉郷の外湯(共同湯)数は計 53。日本の温泉地では別府温泉郷、同じ長野県の諏訪(Suwa)温泉郷に次ぐ規模の数である。沓野温泉には 12、湯田中温泉には 10 の外湯(共同湯)があるが、大半は住民専用で宿泊客や観光客には一部しか公開していない。これらの外湯のうち、最も歴史があってシンボルとなる浴場は「大湯」と呼ばれた。温泉郷では渋、安代、湯田中、角間、穂波、星川の 6 つの温泉にそれぞれ大湯が健在で、一般開放している。

安代温泉の「安代大湯」（上）／湯田中温泉の「湯田中大湯」（下）

また、渋温泉では石畳街や路地裏にひっそりたたずむ 11 の外湯のうち 9 箇所を宿泊客に無料開放しており、一番から九番まで番号と名称を示す幟を掲げた外湯を巡る「厄除け順浴」が人気である。宿泊客は旅館で浴衣に着替えて「順浴手ぬぐい」と外湯の鍵を受け取り、下駄やサンダル掛けで街散策がてら「厄除け順浴」に出かける。九つ総て入浴するのは体への負担が大変、という人も、外湯入口に置いてあるスタンプ台で印を手ぬぐいに押せば良い。最後は、渋温泉街の高台に建つ薬師堂「高薬師」を参拝してめでたく満願成就となる。「九(苦)労も湯に流れる」というわけだ。

渋温泉の外湯「一番湯 初湯」（左）／渋温泉の外湯「六番湯 目洗湯」（右）

湯田中渋温泉郷で歴史がいちばん古いのは渋温泉と湯田中温泉と述べた。温泉郷の裏手には「動き岩」など奇岩怪石が連なり、山岳信仰の場、修験者の回峯の修行場となっていたという。湯田中温泉を見下ろす弥勒峯の麓に巨大な安山岩で造った一石一尊仏の弥勒石仏があり、光背の銘文から平安時代の 1130 年に造られたことがわかる。渋温泉の発祥の温泉寺も古くは修験道にかかわる密教系の寺として始まったようである。温泉寺は戦国時代の 1554 年に戦国大名の武田信玄が再興し、寺領を寄進したことが寺の保存する書状に記されている。温泉は度重なる合戦で負傷した将兵のリハビリ療養にも役立てられたことだろう。渋温泉の石畳の温泉街が温泉寺山門下から始まるのは、こうした歴史があるからで、温泉を管理していた温泉寺境内に以前は温泉を利用した伝統的な蒸し風呂があり、筆者も入浴したことがある。

湯田中温泉は、江戸時代には一帯の領主・松代(Matsushiro)藩主お気に入りの温泉場となり、たびたび藩主が訪れた。もっとも、180 人もの家来を同伴したり、温泉をたくさんの樽に詰めてはるばる松代城まで送らせたり、宿の確保や食事の調達、浴場の改修、樽の手配など、経費は後で払ってもらったとはいえ地元は難儀だったという。

新湯田中温泉「清風荘」の浴舎「平安風呂」

湯田中渋温泉郷には歴史とともに文化も蓄積されている。江戸と信州を結ぶ道路の一つだった渋峠越えの草津道沿いのため、連歌師や俳人もよく逗留した。なかでも著名なのが江戸時代の俳人・小林一茶で、湯田中温泉の旅館「湯本館」主が弟子となって、一茶に温泉付き別荘も提供、独り身の一茶の結婚の世話もした。一茶は温泉場で遊ぶ子供たちが温泉に入って温まる様子を愛情込めて俳句に詠んでいる。石畳街には句碑も並ぶ。

温泉地とは誰もが平和で安らかに滞在でき、温泉と土地の良さで癒される場所。そして文人・芸術家であれば、滞在や交流をとおして新たなインスピレーション、創造力を培う場となる。こうした面からも伝統的な温泉街と情緒を保つ湯田中渋温泉郷の名湯ぶりを味わってほしいと思う。

【温泉地 DATA】

・所在地：長野県山ノ内町
・アクセス：新幹線長野駅から長野電鉄に乗り換えて湯田中駅下車
・泉質：4 種類(単純温泉、塩化物泉、硫黄泉(硫化水素型)、硫酸塩泉)
・泉温／pH：44℃～98℃／pH4.3～8.4
・源泉数／湧出量／湧出形態：約 150 本／毎分約 8700L／一部自然湧出・掘削自噴・動力揚湯
・宿泊・温泉入浴施設：宿約 90 軒。共同湯 53 箇所。他に日帰り温泉施設あり
・照会先：山ノ内町観光連盟 TEL0269-33-2138

本文　石川理夫